

このたび私は、3月26日の天理教教会本部の人事異動により、この3月末日をもって学校法人天理大学（学校本部）派遣を解かれ、天理大学附属おやさと研究所長を退任することとなりました。突然のことではありますが、本日3月30日に臨時所員会議を招集して、ここに橋本武人学長臨席のもとにその旨を所員にご伝達いただき、退任の挨拶をすることになりましたので、一言御挨拶を申し上げます。

天理やまと文化会議の発足

私がおやさと研究所長の御命を頂いたのは、ちょうど今から満10年前になる1999年の4月1日のことでした。その直前まで、私は天理やまと文化会議の事務局長を務めていました。天理やまと文化会議とは、清水国雄表統領の下、天理教でも国際文化財団を発足させたいということで、その基礎をつくるために、教内外、国内外を巻き込んだ、さまざまな学術会議やシンポジウム、そして編集出版などを行うために発足した組織です。私は、海外布教伝道部アメリカ課長を辞して表統領室に移り、同文化会議を組織し、委員会を構成しました。委員長には表統領が就任し、私は事務局長としてさまざまな学術的シンポジウムを企画し、委員会の審議と承認を得て、その事業の推進・広報を皆様の協力のもとに進めてまいりました。

天理やまと文化会議が発足したのは1983年の12月のことで、その活動については、『天理やまと文化会議15年誌』にまとめられています。英語でTenri Yamato Culture Congressと称する同文化会議の成果は、毎月月刊特集を組んだ月刊誌『G-TEN』60巻、『「元の理」講座』シリーズ7巻、『教養ボックス』16巻にまとめられています。

一方、ローカルな天理教の思想をグローバル化する手立てとして、教外の著名な文化・学術・研究者を学際的に橋渡しをするために、世界に通用する「日本国際宇宙文化会議（JISCON）」や「国際経営文化学会（AIMCATS）」といった任意学術団体を立ち上げ、また教内においても「道の経営者の会（TMA）」を東京で同志の協力を得て発足させました。このように教内外・国内外の著名な知識・文化人に対して、学際的に天理を出会いの場所にして、天理教の教えが「高山」の世界に浸透するような仕組みと構造を立ち上げたのでした。いまは幻の図面となりましたが、実はその時には並行して文化財団運営に必要な施設の建築図面も表統領の方ではほぼ完成していたのです。

おちばで初めて顔をあわせ、やがて後に共同して学術交流を国際的に展開していった国内外の著名な学者の数は100名を超えたと思います。そのリストは『天理やまと文化会議15年誌』を見ていただいてもお分かりいただけるでしょう。しかし、その核となる学者のグループは、地理的にも便利で、人材的にも豊富な東京に集まり、一つの学者の集団をつくったと思います。以上のような暗中模索の活動の中での情報交換や出会いをとおして、さまざまな出版社や企業、そしてシンクタンクの人たちとの人脈は広がって行きました。たとえば、各国から宇宙飛行士を日本に招請し、東京や大阪、広島で国際会議を開きましたが、おちばにやってきた宇宙飛行士は月面着陸を成し遂げた

アポロ宇宙飛行士を含めて十数名に及びました。広島に開設支援した国連ユニタール「国連訓練調査研究所（UNITAR）」の実現はもっとも忘れがたい記憶となっております。

ローカルな課題にも取り組む

しかし、表統領の人事が交替すると、流れが徐々にトーンダウンしてまいりました。その一つの大きな要因は、三島神社移転の問題という極めてローカルな難問の解決にありました。これに挑戦する御命が突然私に下り、アメリカに出張していた私に国際電話がかかり、すぐに帰国するようにとのことで、帰国直後に文化会議の事務局を旧宅に移して、清水表統領の下で発足したグローバルな「やまと文化会議」と、喜多秀義元真柱室長の下でのローカルな「神社移転推進」の両方を同時進行させるということにもあったと思います。



この想定外の仕事の発端ですが、二代真柱が実現できなかった最も大切な仕事は、実はお屋敷の足元の「三島神社移転」問題にあったのではないかと、喜多先生に臆面もなくしばしば私が口走ったことが原因ではないかと思ったりもしております。先生が二代真柱に最も厳しく仕込まれた人の一人であったことは、先生とのプライベートな濃密な話を通してよく存じていました。くいついたら絶対に離さないという、まれに見る強烈な意志を持たれた方で、その敏速な行動力と信仰力に私は強い影響を受けました。そのためか、目的に向かってまっしぐらに孤軍奮闘する先生を誤解した人もおられたように思われます。私にとっては、天理やまと文化会議は「表の道」、神社移転は対照的に「裏の道」で、表裏の仕事の広報出版・戦略構築の両方を同時にかかえて、悪戦苦闘の経験を共有させていただいたわけです。積年の難問題を超越し神社移転が無事終わったころ、畑林清次表統領となり、1999年3月に第6次委員会をもって当初の目的を追求するという天理やまと文化会議の役目は終わりました。

おやさと研究所所長として

そういった経過の中で、私は学校本部派遣を命ぜられ、1999年の4月1日をもって11代目の天理大学附属おやさと研究所長・教授に任命されることとなりました。天理やまと文化会議でのさまざまな経験から、天理大学の内実についてもいささか存じていましたから、いずれにせよ、研究所も創立の目的にそった改革が必須であるという気迫をもって、独自の企画シエーマを第1回所員会議に提案したわけです。10年前におられた研究所員は覚えておられると思います。表統領室に提出したこの

おやさと研究所改革案といえるものは、人件費を除いた調査研究出版活動予算は7,500万円でした。この額は天理やまと文化会議の年間予算とほぼ同額でした。しかし、学校本部から承認された研究所への予算額は前年度と変わらず、桁が違っていました。これが最初に味わった私の挫折感であり、相談相手もなく次の手をあれこれと考へて進めてきたつもりです。10年間この改革企画案は、私の机のいつも目につくところにラミネートして張り続けており、初志貫徹の意識を潜在化させるエネルギーの種となったと思います。

月刊ニューズレターの『グローバル天理』は、就任翌年の1月に刊行を開始しました。当初、タイトルを「日本聖書協会」の機関誌『Sower (種をまく人)』に学んで、『Tenri SOWER』にしようかなどとも考へていました。ちょうど『Sower』の1988年の12月号の特集が「ギョツラフから21世紀へー21世紀はみ言葉から始まるー」という大変迫力のある内容であり、その迫力に刺激されたのだと思います。私は聖書翻訳会議発足以来のクリスチャンでない多分唯一の会員で、その第1回翻訳会議に出席して、彼らの神のことに對する情熱と真剣さに天理教の一翻訳者として非常なインパクトをうけていました。

いずれにしる、『グローバル天理』発刊時にたてた17項目におよぶ研究テーマ案は、どれだけ達成できたかと反省すれば、さまざまな想定外の制約と所員のかたがたの協力があつたにせよ、一流企業にたとえれば、私は管理・研究者兼所長として失格であつたと申し訳なく思っております。ここに我が身の不徳の致すところを深くお詫び申し上げたいと思います。

しかし、目に見えて評価されるものがあつたとすれば、創設者記念館「若江の家」の改築推進、天理スポーツ展シリーズの開催、天理異文化伝道論と天理スポーツ学の関係学部における開講などが思い出されます。とりわけ忘れられないのは、国際地域文化センター発足に伴うセンター長兼任時代の紀要『アゴラ』誌と情報誌『コスモス』の発刊、そしてインド、アフガニスタン、アフリカでの国際的な諸活動です。前者は学生をつれての土囊による住宅(ボンガ)建設やチェックダム建築、後者はカブール大学と共同で制作した映画作品、そして2008年のTICAD IVに関わるマケレレ大学における東アフリカ国際会議の開催などです。

最後の3年間は、「建学の精神」にもとづく東アフリカ貧困緩和自立支援のプロジェクト推進でした。これは心身ともに非常にストレスのかかったものでした。以上は研究所ではなく、御命によりすべて大学の仕事として行いましたが、おやさと研究所員の協力がなければ達成できない事業でした。加えて在任中に出版させていただいた「元の理」を主軸とした研究や、異文化伝道に関する拙著などが数冊出版の陽の目をみたのはまことにありがたいことと思っております。ここに謹んで関係者に長い間のご協力を感謝する次第です。

今後の展望一次世代への種まきに向けて

今後は、残された仕事(アフガニスタン文化支援活動)に向かう所存ですので、よろしく願い申し上げます。この事業の



予算規模は十数億円にかかわるもので、奈良県民民主党の戦略会議をAランクで通過したカブール大学メディアセンター設立のプロジェクトです。その決着は国家予算がようやく終わった時点で、これから複雑な政治折衝にはいる段取りになっていますが、各新聞社が取材に来所し、すでに記事として掲載されたことは皆さま御存じのところではあります。

現在、アフガニスタンはもとより、インド、ウズベキスタン、シンガポール、イラン、米国(シアトル大学)、そしてフランスとのネットワークが出来上がっており、日本政府に積極的に働きかけ、いままで築き上げてきた教外・海外の人脈をフルに展開して、世界平和、陽気ぐらし建設のお役に立つ、新たな「種まき」をしたいと決意している次第です。関心のある方は、4月にこのプロジェクト推進の目的で移転した研究棟4階の研究室をいつでもお訪ねください。政府からポジティブな返答がなくても、必ずこの仕事は広報・においかけになることは言うまでもなく、「根」を掘ることによって新たな人脈が地底からレアメタルのように現れてくると信じています。

一方、地元のユートピア共同体構想も、中山みき教祖のお言葉に着想を得てひそかに練っております。しかし、大学を去った私には、調査研究予算も共同研究者も与えられておりません。この再出発は、それこそ徒手空拳ではありますが、一単独布教師の心構えで、出直しを覚悟し、あらたな理想像にむかって、零からの旅立ちであることを自覚しております。すでに遊学期に入った人間が、理想を掲げて進むなどとはお笑いごとかもしれませんが、これも少なくとも次世代に対する「種まき」にはなるだろうと夢みている次第です。

それでは、新しい所長のもとで、オバマ米大統領の就任所信演説ではありませんが、所員は過去につもった「埃を払って(dusting off)」、継続すべき研究領域は充実拡大し、改善すべき点は勇断をもって改革し、研究所創設者・二代真柱の質実剛健の面影に宿された親の思いを常に心に置き、時代を先取る気迫と精神をもって、あたらしい道を開拓され、天理教学研究のさらなる深化とその普遍に抜け切る学問的レベルアップへの決意を祈ります。所長を辞するにあたり、皆様へのご協力の感謝と期待を述べまして、退任のご挨拶に代えたいと思います。どうも長い間ありがとうございました。

(編集者記：上記は井上前所長の退任挨拶を文章化し、氏自らがそれに若干追記・訂正したものである。)